



會稽三浦海言
六

^ 13
3114
6止



へ 13
3114
6

子會稽三浦與言

浪速 濱松氏助

子會稽三浦與言

會稽三浦與言卷之六

老の身代り

浪華 高木よそ

濱松氏助

か著 本郷真砂町 十四番地

井

岩

搦手の大将梶原平三景時が折の城内小大音あけ重忠
ハ何國小ぞ畠山におせぬ三浦の大将明小浩腹はして首
うつたると出合ふと叫ぶふま色よおとんき馳いこ一家の女中時
も時として遠く地なるかそあふの一間をねひ出系玉房御寮を
疎まはれとお大がうけ寄の上制とふりち梶原平三景時ゆとあく一
間小入来まの重忠大助詞を揃心得る景時大助が首打たると
醉狂たるかうと答むはの同ぬふじていふ重忠三浦の大助美明を
某か手ふうけ討たつじ最期小及んで我首ハ聲の重忠ふりて

三浦與言卷之六

度と詞少い出さぬと其色目を察せゆら吾高名をゆつたは
 是迄首を持せしと云せも果は三浦の大助は是ふあり目小か
 らとや梶原と浩はの嘲笑ひ大助小向つて大助首取ると
 呼ぶふりうい云ねと知まは身替つると聳男の仁義を感
 景時が寸志ぞやと語まは二人のあつとむらうと厚情詞尽き
 ごとと頭をさげて一礼象けうも大助が身がらと何を好身小向
 國の誰ぞせめては首小對面は恩を報ゆの念佛せん早く是と
 けうち小雑兵の若侍縮小包じ白髪之首重忠が前小と名
 置ハお犬目速くうけ寄て此首こそは賤妾の父そも何故小
 ゆふふと人目も取ね叫びきた雑兵と見へ以前せんの若者陣ちんうさ
 脱して是より姉入替つと果たは父上のあまごごと嘸ふりりききぬ

かむじといひ色の妹のよきと今爰あて逢あひて逢あつた思おもひおもひおもひおもひ
 小浅猿あさざるの父上の家期大支の御主の身代みしろのれれの道少みちすく
 わらふはとも妹うかつに姿といひ姉の不審ふしんをきやじ様子ようすを
 諦あきらめしと尋めふも是つと色いろの姉あね入理いりつと身み身み身み
 涙なみだのわらふとから最期さいごを教しめししの浮世うきよの義理ぎりといひも
 亦涙またなみだきたるうらまると梶原も二人の風情ふうせい見みふふ不便ふべんの氣きを
 取直とらしし大といひ娘あつと聞傳きつたへへの汝なも父ちち也やの心こころも
 添そひ持もじじ大刀たうたうを賣うりり代しろなき人其為そのため小一命いちいのちを惜おぼししみみ存ぞん見み
 とてかごとく金子こがねをわらへ大刀たうたうを買かひ受うけ其後そのち娘むすめりりんんも
 鼓つづみへへとと養育よういくせし折まりり衣笠えがさの城攻しろをくを敵たりり朋友ともの
 大助何卒命たすけなすけなすけなを助たすけたくく昼夜あちやああららを碎くだははしし小建こた氣きも



梶原景時

昔の三浦島

此老人姉のお犬が一家の主人大助とて為とつひ原來とては命七十九歳の白髪首の幸ひの身がうると云捨小即座小は是非の論小及いぬを則渠が子へた糸刀をりつて梶原の残念な討たふとて原來へ小知らさぬ大支妹梢小心をのりせ斯計らひ来じし申斐とる兄弟の対面心の歎き推量せよ其父の記念をも是を見よと帯した糸腰刀技も其不思義やかこそ立居たり玉房の御寮とてと立ちよ小使や忍じや小糸の釘の光ののちふ八百万神あはれて吾小夢又目を注連繩はこを助けてたへぬ堪ぐやくと震ひつる口をきこ

○ 草葉隠き

玉房が容体を見て各々心付き借ハ狂気と見へつるも物の障導してあはしよあつた糸物の所為なるぞ各葉まきと責問のあぞ各葉まきとハ僻はくしや吾を誰と三浦の一家小依を奈須野の露とある玉房のまへが一念玉房の皮肉小入つ乱気と見せて蘭菊の花の姿の隠家も傍小付添ふしるた女お犬といふ名小心を危やまきおりの海氷のつまき小狐火の燃ふ思ひも消失して阿那浅積まじり語ると奈須野の原の青緑草葉小あのみ身の果も玉土の内とて救もく退治の勅命象は三浦の弁美明弓矢とて名小お武士統率をたらし百日の大迷物小手馴じ手たき進つまのつ探つ小付まき詮方あく取つまはしを美明が笠前の下小射伏らまき終小めをじりの刀野狐丸と名を岡た小空忍りした釘

現在小三浦の重宝高類の通かも失てうまらぬ身の骸骨の
 後何と仇もうくも那須野のつゝ小飯へるそと約東望く動き
 石小精あや水小おと風の大虚小渡あがと忙と狂ひ見えか
 つと轉ひて卧たるとけふ人々驚く其中小大助横手をたゞ
 うら何其刀の野挑丸とや暫らく是へとて清て見まゝ野千の河
 小遠いと疑ひも死受の釵是を身小添へ持と七十九歳の此
 老人大助が子小紡まると大梢此祖父縁るあう
 床しれ者も此方うまると勇気も洞あ涙と姉と妹顔見合
 て不審の体重忠も梶原もと何故ぞ子細いんといふ大助
 打點頭百六歳の今日まで娘も出ぬ夏るい何まこの不審
 有理口几房の娘とて此親が此大助を父と知らぬ語つて向

えんやうもし祖父と向て惘あゝ理と先年某勅をうけ那
 須野の原小くたはし時三十三小足らぬ若盛と這苗の後然り
 里の女を酒宴の相手旅の枕の添臥小懐胎あつても深き縁男
 子小も女子小もせよ平産の後子へと澄小残せ此刀やと経て
 迎ひをせせし不便なれば彼女産の上で空しく成り産落
 せし稚子いふか糸人う育てやらん夫迄存せとああ多た便
 己を同さう若た時火気も強し思ひ流して暮せが一年く寄
 ぶ年小思ひ半と彼が夏九十三騎の一門と賑々敷く入へやも
 肝心要の惣領小生死も知らまじ別はし心小力を落し子
 の行方を案とふ七十九年尽ね親子の験の潔く此此處
 汝り孝心をうしほしぞわ我一日半日の不便加へ夏も同く

世小在なうら親も白髪子も白髪知て暮せ悔も子ハ
 親小似ふとくハ姉小似ても姉小似ても若しとて泣き
 骨うらめて有つと生顔見ぬが去とて残念小存と系提原
 とのと笑ひを作つて終らせと目小涌く涙の玉堪へぬてむせ
 返すハ始終を聞て兄弟が情ハ祖父君めて在しうと致の中ハ妹ハ
 背筋を撫て鐘愛ハ血筋あつと親身の多死寄と姉は泣て
 父の首大助が膝小寄せ年来日來の悔も直小親ハ此世小あ系
 やら無やと名さへも知らぬ因果人と仰らきて有つ小思を流
 知らび天然と御孝行の御封面唾し御嬉しく有つと吾も連
 も悦ひの尽せぬ余の歎にとも御首小竟あつ一言父上様うめ
 と大助ハ彼小あまてた是のの言まぬと日來の利波ハ何処
 知らば後ハ涙も悔言有合女中も較繋りか縁詞改た力をも
 歎きを凍むる下うも祖父の心を察しや一度小つと伏況
 色ハ涙の鯨波武勇の重忠提原も哀も責來不貫ハ泣
 防たねてそ見之小けあむひ伏た玉房ハ心地冷く起あがり夢
 見と様小一部始終聞た正しく叙の徳と情の一礼愁ひのくやそ
 あはれも似ぬ其風情さてハ本性小たち飯にうとお大が悦ひ
 一家のいそぎ歎きの中の幸いと系時姫の手をどつて三里忠小引
 後ハ誰とがかるぬ二世の縁支ぬつき小て凱陣あま衣や美責の
 高名ハ三浦の大助美明の首うたると名乗らまはしと捕りて
 某も高名なるとハ叶はし何をうか実それハ三浦一家の女武
 者一騎ものこつて生捕て世話とが高名く祖父と安堵百も

世小在なうら親も白髪子も白髪知て暮せ悔も子ハ
 親小似ふとくハ姉小似ても姉小似ても若しとて泣き
 骨うらめて有つと生顔見ぬが去とて残念小存と系提原
 とのと笑ひを作つて終らせと目小涌く涙の玉堪へぬてむせ
 返すハ始終を聞て兄弟が情ハ祖父君めて在しうと致の中ハ妹ハ
 背筋を撫て鐘愛ハ血筋あつと親身の多死寄と姉は泣て
 父の首大助が膝小寄せ年来日來の悔も直小親ハ此世小あ系
 やら無やと名さへも知らぬ因果人と仰らきて有つ小思を流
 知らび天然と御孝行の御封面唾し御嬉しく有つと吾も連
 も悦ひの尽せぬ余の歎にとも御首小竟あつ一言父上様うめ
 と大助ハ彼小あまてた是のの言まぬと日來の利波ハ何処
 知らば後ハ涙も悔言有合女中も較繋りか縁詞改た力をも
 歎きを凍むる下うも祖父の心を察しや一度小つと伏況
 色ハ涙の鯨波武勇の重忠提原も哀も責來不貫ハ泣
 防たねてそ見之小けあむひ伏た玉房ハ心地冷く起あがり夢
 見と様小一部始終聞た正しく叙の徳と情の一礼愁ひのくやそ
 あはれも似ぬ其風情さてハ本性小たち飯にうとお大が悦ひ
 一家のいそぎ歎きの中の幸いと系時姫の手をどつて三里忠小引
 後ハ誰とがかるぬ二世の縁支ぬつき小て凱陣あま衣や美責の
 高名ハ三浦の大助美明の首うたると名乗らまはしと捕りて
 某も高名なるとハ叶はし何をうか実それハ三浦一家の女武
 者一騎ものこつて生捕て世話とが高名く祖父と安堵百も

武勇を盡きたる提原が情の詞を予尔棄りた大助重忠小
打向ひ父小代つて死を慕ふ志に破らまじと衣笠の城の大將や
吾名を吾子小溢号心床の返るるは三浦の大助多明と最
期も勇々浦老武者の年積つて七十九歳と記録の面小記して
たへ吾の亦此年月玄翁和尚の法へを受け座禪の忘小心を
寄す不渠も菩提後世のため今より直小有髻の僧名も長命
の瑞を記し瑞翁と名乗し恩愛一門振らつる此身の志賀
の一木の松浮世の志れ小心の法と悟切たる詞のよも重忠夫
ぬ感入願掌はしたる記録の面諸を未世小書残と東鑑
盛衰記小百六歳の大助を七十九歳と記せし此理の事と知ら
まける時刻のまは提原が早凱陣と諫めの詞名残は尽ぬ
王房姫が大が位声重忠の誘ふ袖の晴まらぬやまを残しあつし

○ 枯木の花

喟めんと獲せし是を張棄んとしていふもとや兵部佐頼朝
石橋山の戦小打負志づくく人の和を志めて天の時をまち
るし小坂東ハケ國ハの及まを志めて加ふる護代の御家人
三浦の一黨文藏国安を初めして御勢都合二万余騎石
橋山の要害小再び御陣を召まきけり又立るる春のそら
不思羨や先年御身を隠し居木の空穂枝栄へ咲花
色も紅梅の勝色見とる軍の勝利降志く雪の山吹旗小
ひた随ふ天が下各位とるまき奉つまは実の千年の誓ひ
枯たる木も花咲といへば頼朝此理を考へ見ふ小平相

國清盛入道迄ま小即つ關の官を撤西海を悩はし民ら之
 たる枯木小似たるを輕胡其凶惡を切鎮め民を大山のや
 小をう枯木小再ひ花咲く理まの時もこそあま此谷木に
 花咲ま此あとる思へ軍小勝ま天の告我心鬼小後
 たる然ま此後のたり軍兵のむす所必く乱妨をいはめ
 軍役を着ま田畠小植ふりの一葉小ても根小損ふと
 ころふ天小背またる罪入る其首を切て樗の木小晒
 とどしと宣へ三浦北条土肥岡寄雜兵下部小いま近心小
 感涙催て皆ことの御受ある時小林鹿のうさ騷かく依小
 敵の責つみ鯨波驚破敵の攻よせたとと覚へたと弓よ鏝
 よと鬨めけば輕胡の誓と鎮めたまひ敵の長の道をあませ

人馬の足も倦ふし九折の難所を登らんと死味方一同に
 てかこ懸つて迎まくる皆谷座小落入く生きて敵ふの
 よも有まは推つある馬牽輕胡馳まりて諸軍の手分を
 定むしと御馬小閃と乗まへ鞍の心や悪かるゆんの馬
 ちたる小勿れを引まひるを宙小引立く馳行の乗
 人おとり立駢き立寄まる踏ちり山畠田地のまりる
 踏くつ踏穿てば輕胡た右の柔體を静小とつて乗まるの
 漸こ小おり立まいハ馬上も騰まりて目之を時以告入る
 いまを倚口の手此馬をねて知らるる其言有じた小ゆい
 不凋法言語同勢急度孔明をよと呵つくた

九尾の狐
一尾の狐
如所

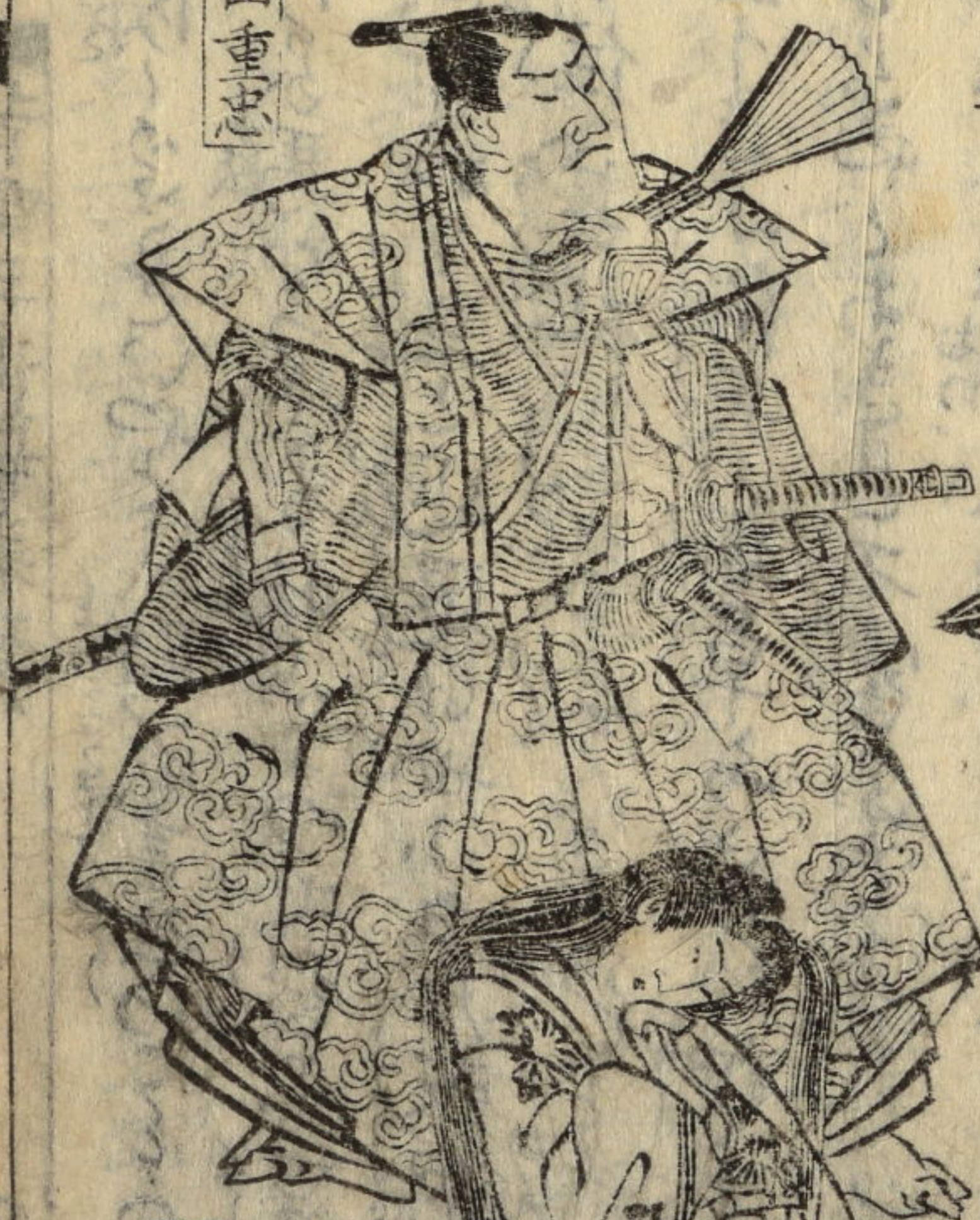


三浦義明

靈敏の威徳

九尾の狐を
走らしむ

富山重忠



玉房姫



あいな

梶原景時



こぞと

頼朝よりとも聞きこめめのこささいいややのこのこ時政ときまさ畜生ちくせいのこのこ人ひと知しるるへへるるはは頼朝よりとも
 棄得あきらたるる馬うまなりなりともとも時ときふふつつてて習うふふ支し人ひと心こころ同おなじじきき
 小科せうかははままかかりり之これとと逃退にげがけけせせ小せうささららたた頼朝よりとも不よ是これ返かへのこころをを願ねがふふ
 まましし各おの位の位の其その礼れい未ま来きてて云いふふとと御佩おん刀たがのこころ手てををううけけてて
 人ひとおおろろききふふ仰おほ天あま周章しゅうふふああめめ死し押おしととめめ君きみ少すく何なにのの御ご
 生害せいがいああららふふととああまま目め不い審しんふふららるるととかからら頼朝よりとも神かみ汰たををらら
 くとと流ながるるせせめめひひ各おの位の位の少すくああままをを見みるるももここ踏ふみみたたららふふ畠はたけをを
 不便ふびんやや民たみののささららひひ少すくてて歳久せんきうままふふ雪ゆきのの寒さむききををいいららとと植うええてて
 たたらら表おも畠はたけ傾かたてて實みらららら幾い莫もく人ひとの上のうへをを助たすけけんんををああららぬぬ
 踏ふみみたたららせせ土つち小埋こ埋うりりしし朽捨くす子こ天てん小背せ大罪たい人ひとのの北きた東とう朝あさ四よ
 畠はたけ小作せう物もの一葉いち少すくもも損こりり首斬くびてて人ひとのの禁いめめとと制法せい法ほう
 をを出いせせ小其せう摩まをを去さららひひ昔むかししし頼朝よりとも生なてて制法せい法ほう立たへへきき生せい
 害がいせんんはは此理このととののししををままをを留とどめめ各おの位の位のもも又また天てん小背せ大罪たい人ひとのの北きた東とう朝あさ四よ
 放はなせせくとと宣のたまふふ人ひとのの噫あいい嘻いとと感かん入い俱く小涙せう小哭くふふけけりり

○源家の栄

角かどてて諸卒しよ詞ことばをを揃そろへへ君きみ八源はつ氏うぢのの正統せい平家へい小せうららつつてて四海しやうののままけけきき
 をを救すくええせせめめ御身おん身みううららふふ小せう只ただ今いま此處このゆゆてて御生害ごああつつてて民たみのの救すく
 きき天あま方かたららひひ是これ非ひ小却せうととははのの下したとといいふふとと理こと害がいををととららてて凍こめめ
 けけらら頼朝よりとも打うちち點てん頭とうせせめめひひ突つくくららままるる理ことののああららとと然しからら生害せいをを
 苗なまつつてて首くび小擬せうととふふ我われ黒くろ髪かみをを切きてて制法せい法ほうとといいふふとと既すで小せう
 よよとと見みへへららふふ処ところ小哲せうとといいふふとと谷木やののううちち小せう壺かわわつつてて畠山はたけのの次つぎ即すな重かさ
 忠ちゆう梶かぢ原はら平へい三さん京きやう時とき雪ゆき間まををううららひひけけ立たちち出いだだすす人ひとをを在ありり馬うまきき天あま石いし拔ひ

くつろけ取廻と梶原とじも騒うと驚にめめ旁に魚て
 此兩人の御味方と心つけ時節を待折節怒まらう我君の心
 心ばしを窺ひたてまつえと隠ま志のびて此仕合只今の御仁
 心残ふらう承らうと称りて御加勢の人教小はらふ二人の
 心底神八幡いづるをばしと志づつて頭を玉ふつけ君臣の礼儀
 なるを頼朝御機嫌斜むび二人が心度よく知たると心打解け
 見えあへる重忠の御前小進言て只今うけめり御首のうに御
 髪切て御制法をいさまんと御支尤千万上小偽りあふ時
 下随らる重忠御介錯つらまつら承りて指添ひん抜き御
 背小立廻まらゆ降参小間も此重忠如何と人々不審不体
 頼朝才も怒まらぬにたも優くと摩らへる重忠御髪を
 おけ前髪とらと押切つら見々見々各位御首小あ
 此前髪切て直き御元服いづきも御祝儀申さんと呼ぶ
 遠小入大勢小笑壺小入御首のうら小前髪切とと小
 元服あつらふ茶礼もと小平産のいも同く夏天晴
 頼朝の重忠や感あふ奉つる時もあるせは林鹿と
 先陣の朕野の五郎景久間ちる進んで大音上の不頼朝
 當時流人の身をりつて平家の御代を覆かへせん笑止と心
 をあつたる朕野をたのめ命まらうと小中赦して得とせん味との
 たると文蔵国安御前小進言て朕野の主人貞田の敵を敵
 小下しあつる生前の本望見小過とつしんで願ひた下まを
 ハ神妙く望み小任せらうらばじと御流あまら難有しとつたら

あけ前髪とらと押切つら見々見々各位御首小あ
 此前髪切て直き御元服いづきも御祝儀申さんと呼ぶ
 遠小入大勢小笑壺小入御首のうら小前髪切とと小
 元服あつらふ茶礼もと小平産のいも同く夏天晴
 頼朝の重忠や感あふ奉つる時もあるせは林鹿と
 先陣の朕野の五郎景久間ちる進んで大音上の不頼朝
 當時流人の身をりつて平家の御代を覆かへせん笑止と心
 をあつたる朕野をたのめ命まらうと小中赦して得とせん味との
 たると文蔵国安御前小進言て朕野の主人貞田の敵を敵
 小下しあつる生前の本望見小過とつしんで願ひた下まを
 ハ神妙く望み小任せらうらばじと御流あまら難有しとつたら



枯木花咲て
源家の葉を
あらしむ

頼朝公

吉野三浦集巻二



喜平次後家

大三郎

藤九郎

真田文蔵

大場三郎

上りの小腰野汝と其ハ軍せぬ主人真田殿の敵打去る
 なまよと招ききて景久眼をくつと見開らぬ敵うちて車
 ても人をも切き六面白相平小きつて得せんとも願ひつゝ其
 小文藏鑑さけ捨て素肌小鉢巻身とくろ氣小出向へ心
 得たると照野も共小のやると速く鑑の上帯もちきると共素
 肌たかやんの兩人たかやんう左右小うまきて立合へ御大將を始めして敵の軍
 兵味方の人々互小色うけ力を添かつを飲んて見物あるハ
 贖がほくも際へ腰野ハ坂東一ハ大力倍小かつて打刀固安ハ
 らつて難大方小腰野が尤もの大股をもちると寸と切ておとハ
 かつをもと轉ぶを思置うけく終小難きくぞあの本望知新処へ
 藤九郎盛長ハ八丁碌が後家同しく大三郎いひして生捕り

大場の三郎景親小ハ重の繩をうけ御前遠く地小引居まゝ
 胡大だ小御感ある軍用金といひ大場を生捕手柄くいは
 ころもとの王後ぞと御悦び限つとく平家一味の見せぬ小
 大場ハ刑戮あるとぬじと引立よ目出たしく凱陣と愷樂つ
 らふ味方のせの根つとく固めふる石橋山著ふ平家をうあはせ
 近付源氏一統の御代の基ひの筆初め會社普山小ひふ久
 と竹旗手も白き雪ふると積ふよりの希人の支路を交
 小書とくし

中山堂

高水



會社普三浦與言卷之六 終

三浦三浦與言卷之六

十四番地

鈴木濱洲先生著

温盡隨筆

全四冊

此書ハ固字ノ隨筆ニシテ雅俗ノ考証
ヲカ子學問ヲ心カクルニ甚ク益アル
故ニ博物家モ座右ニ置ベキ書ナリ

頭遊仙屈鈔

唐張文成作
唐張文成作
唐張文成作
唐張文成作
唐張文成作

此書本邦ニテ中華ノ小説ヲ譯解スルハ
此書ヲ以テ始祖トス嵯峨天皇ノ時學士
伊時ナルモノ神仙ノ譯ヲ得テコレヲ解ス
トイヘリ小説家必讀ノ書ナリ

一勇齋國芳畫

忠臣銘々傳

粉色入
全壹冊

此書ハ東伝の義士四十セ個徳意の
實徳を奉て画立圖等々大くの形流を
有るハ一ハ地圖手本の最よる判

加藤在止翁著

太平國恩理談

全五冊

此の書ハ和代古平國恩の事傳説を以て自
身胸中のたのしみを述一人に吾代をむるの
徳意を述あり又小書等の自在を以て
人々を感ぜしむる未だの士而や情
侘の非を痛み及訓の土城著述して代利
びして名を……んとするの概ひであら
ざれば天下國家の幸慶いづこは小書と
やハ其ありがごとき書あるハ半は俗界
女老少ともに能く其代會を傳せし
儒佛の靈流を傳はれたの概ひであら
うはり此小書を……んとする者
……美小座右……

造物趣向種

全二冊

此書ハ氏神の祭禮他種は會式ハ終年
を以ての書おも事なるが……造物を……
人と……造物の……
……造物の……
……造物の……

同貳編

近刊

和對照書札

前後全二冊

漢朝人ノ當時應用ノ書牘ヲ和文ノ書
簡ニ翻譯シタルハ學向ニ益ニシテ且ツ
星池氏ノ書ノ尊養ナルヲ嘆賞スヘシ

三教童論

全四冊

此書ハ三教童論の……
……童論の……
……童論の……

古今武勇歌仙

小本
壹冊

此書古昔より武勇の名將の……
……武勇の……
……武勇の……

……

